

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.17

開館35周年記念号

発行日 ● 平成23年(2011)9月10日

もくじ

ごあいさつ……1

「是!」展出品解説……2～11

学習院大学史料館 開館35周年記念コレクション展「是!」のご案内……12

第65回・第66回史料館講座のお知らせ……12

新刊ご案内「写真集 大正の記憶—学習院大学所蔵写真」……12

ごあいさつ

学習院大学史料館は昭和50年(1975)の開館から、35年を迎えました。この間、46回の展覧会と64回の講座を開催し、大勢の方にご来館いただきました。また、学内の歴史ある建築物を調査し、国登録有形文化財としました。紀要、目録等の出版物も53点刊行いたしております。

当初古文書だけしかなかった収蔵品も皇族・華族・学習院関係のものを中心に考古資料、絵画、陶磁器、漆工品、染織品、金工品、写真資料、アジア関係資料、そして教材資料など、多岐に渡るようになり、その数もいまや14万点を超えています。大学博物館で、ここまでの収蔵点数を数えるところは、そう多くないでしょう。これはひとえに当館の活動に対しご理解をくださり、資料をご寄贈・ご寄託くださった所蔵者の方々のご助力、ご教示くださる皆様のご厚恩の賜物とこの場をお借りして、御礼申し上げます。

さて、この多彩な収蔵品の中には、当然のことながら、歴史史料として重要であるもの、美術作品として優れているものなども数多く含まれます。しかし、当館の展示施設は狭小で、すべての収蔵品を陳列することは不可能です。

そこでこの度、いままで公開する機会がなかった収蔵品や、ご来館の方から再度見たいとのご要望の多い資料などを公開陳列する展覧会を企画いたしました。名付けて「是!」展です。史料館員(館長・研究員・助教・学芸員)が是!と推薦する逸品を「是!ポイント」(＝おすすめポイント)と共にご紹介いたします。

日頃なかなか目に触れることのない収蔵品とその収蔵品に対する史料館員の思いを是非この機会にご覧いただきたいと思っております。

また、展示室では史料館35年の歩みが一覧できるパネルも併せて展示いたします。展示室にお運びいただき、こちらでも高覧いただければ、幸いです。

(館長 高橋裕子)



学習院大学史料館 開館35周年記念コレクション展

「是!」※開館35周年にちなみ、選りすぐりの35点を陳列いたします

〔期間〕 平成23年 10/1(土)～12/3(土)
休館日：日曜・祝日・10/17・11/4・11/5
Ⅰ期：10/1～10/31 Ⅱ期：11/1～12/3
※Ⅰ期・Ⅱ期で一部展示替えをいたします。

〔開室時間〕 平日 12:00～17:00
土曜日 10:00～17:00

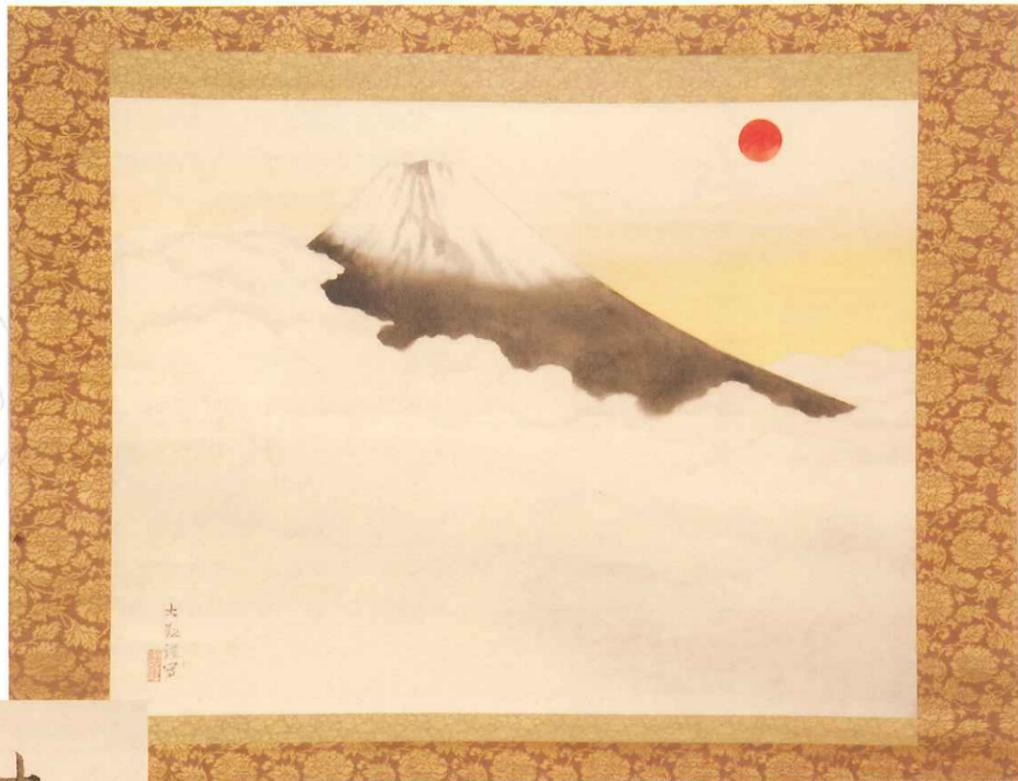
〔会場〕 北2号館1階史料館展示室 入場無料



よこやまたいかん 横山大観筆「**霊峰不二**」(一幅)

Ⅱ期

昭和12年(1937)頃
筑波家史料



(本紙:56.5×74.1cm)



富士を照らす赤い日は、朝日でしょうか、夕日でしょうか。大観が生涯に描いた朝日を通覧すると、必ず朱が施されています。大観にとって、赤く燃える日こそ、理想の日の出だったのではないのでしょうか。



2 広がる雲海に富士が頂をあらわし、日の出の空は黄金色に輝く——墨、朱、金のみを用いて、清々しくも堂々とした霊峰が描かれています。筆者、横山大観(1868~1958)は、生涯におよそ1千点以上の富士を描いたとされ、大観といえば富士の画家と認識されるほどです。大観は一体どのような思いで、富士を描き続けていたのでしょうか。以下、大観の言葉を引用します。

(前略)富士の形だけなら子供でも描ける。富士を描くということは、富士にうつる自分の心を描くことだ。心とはひっきょう人格に他ならぬ。それはまた気品であり、気はくである。富士を描くということは、つまり己を描くことである。己が貧しけ

れば、そこに描かれた富士も貧しい。富士を描くには理想をもって描かなければならぬ。

(大観「私の富士観」『朝日新聞』昭和29年5月6日)

すなわち本図の、限られた色彩や最小限に抑えられた筆致は、大観の理想とする心の富士山が象徴的に表わされたものといえるでしょう。

ところで、本図とほぼ同じ構図、彩色で描かれた富士が、昭和初頭から20年代にかけて数多く描かれました。さらに本作と同じ印章が昭和12年(1937)に使用されていることから、その頃の作例であると考えられます。また、署名に「謹写」を入れるのは皇室への献上品が多く、本作も山階宮家の伝来品です。

(助教 鎌田純子)

こくぶんゆう あきら しんのう さん そう ぞう 国分文友筆「**晃親王三相像**」(一幅)

Ⅱ期

明治24年(1891)6月製作
山階宮家史料

山階宮家初代・晃親王の劇的な人生の、大きく3度に及ぶ転向を「三相」で書き表した肖像画。

晃親王は、文化13年(1816)9月2日に、伏見宮邦家親王第一王子として誕生。文政7年(1824)落飾し、濟範と称します。ところが、天保12年(1841)数え26歳の時に西国へ無断出奔したため、その後16年間蟄居を余儀なくされました。長い蟄居生活の間、親王は勉学に励み、特に世界情勢の知識は深くその英明のうわさが広がります。元治元年(1864)、孝明天皇の勅命により還俗。孝明天皇の猶子として親王宣下、晃の賜名、山階宮の宮号を賜りました。その後、孝明天皇を援けて幕末の多事多難な時期に活躍。明治以降は皇族長老としてその役を果たしました。明治27年(1894)79才という高齢のため明治天皇から宮中杖を下賜され、同31年数え83才で薨去しました。

本図は、上段に20代の濟範と称していた頃の僧体姿、中段に49才で還俗し孝明天皇の猶子として親王宣下を受けた頃の直衣姿、下段に晩年期の皇族用大礼服をまとう姿が描かれています。下段の白ズボンの皇族用大礼服姿の晃親王と、ほぼ同じ姿形の肖像写真があり(挿図)、この写真をもとに絵が製作されたと考えられます。写真は、明治24年数え76才の時に撮影されたもので、本図も同じ年に描かれたことが落款から判明します。なお、同年9月23日勸修寺での彼岸会にあたり、親王自ら本図を同寺靈明殿におさめたことが知られます(『山階宮三代』)。

筆者国分文友(1823~1900)は、晃親王に仕えた絵師。本図製作当時、西洋からは写実的な画法が取り入れられていたものの、本図には岩絵具を用い、日本古来の伝統的な線描による肖像画法が用いられています。

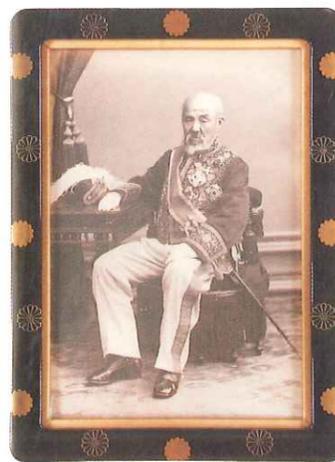
(助教 鎌田純子)



(本紙:109.6×41.8cm)



山階宮晃親王の青年期・壮年期・晩年期の肖像画です。下段の絵のもとになった写真が伝存しています。写真や銅版画、西洋画法による貴頭の肖像が流行した明治半ばに、あえて日本古来の画法で描かせた点に親王のこだわりが感じられます。

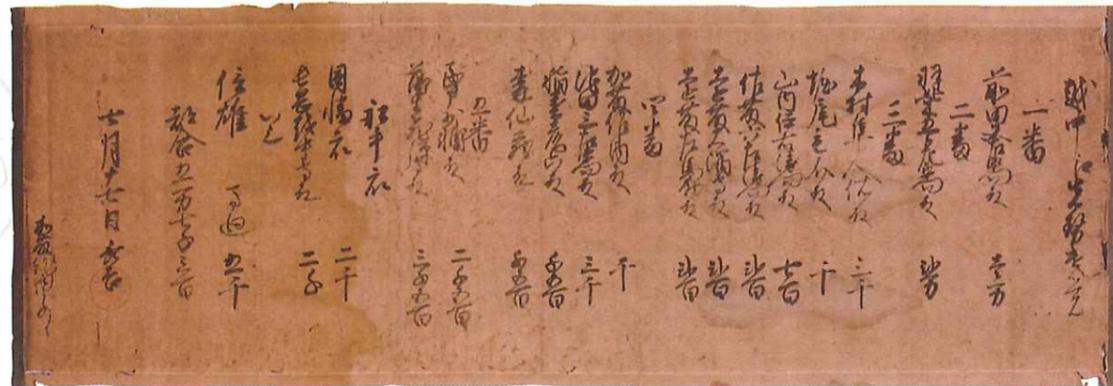


(挿図)
勸修寺紋付額入れ
山階宮家晃親王肖像写真

はしば とよとみ ひでよししゆ いんじょう えつちゆう え せん せいつかわすのおぼえ
羽柴(豊臣)秀吉朱印状「越中江先勢遣覚」

[天正13年(1585)]7月17日
 加藤作内(光泰)宛
 阿部家史料

II期



(29.9×92.9cm)

本能寺の変後、秀吉による天下統一に向けての動きが活発化し、各地で戦闘が繰り広げられました。その幾多の合戦の際に効率的な戦力の配置や軍役人数などが考えられ、作成されたのが「陣立書」です。

秀吉は、天正12年(1584)小牧長久手の戦いで、織田信雄(信長次男)を臣従させ、信長の後継者としての地位を確立し、勢力圏の拡大を図っていきます。その全国平定過程で、翌13年7月の関白就任後、8月に信雄に味方し敵対していた越中(富山)の佐々成政攻めにとりかかります。

本史料は、この越中攻めに動員された、美濃大垣城主加藤作内(光泰)に宛てて出された陣立書で、陸奥国棚倉藩主阿部家に伝来したものです。軍勢は、一番手から五番手で編成され、越中に近い加賀の前田利家を先陣として、越前・若狭・近江・美濃勢が続き、中には山内一豊、池田輝政ら名のある諸将の名前が見られます。その他に陸路からだけでなく、「船手衆」と記される因幡衆(因幡鳥取城主宮部継潤の手の者)や丹後宮津城主細川忠興といった水軍組織も動員されていることが注目されます。最後に記された総大将の織田信雄だけが敬称もなく呼び捨てなのは、この時の彼の立場を暗示するものといえましょう。

この越中攻めは、富山城主の佐々成政を討つ目的のほか、信雄が家臣であることを天下に知らしめ、なかなか臣従しない越後の上杉景勝を勢力下におこうという、秀吉の狙いがあったといわれています。

(学芸員 丸山美季)



天下統一への足跡を示す陣立。豊臣秀吉が「陣立書」という形式の文書を、また朱印を用い始めるのは、天正12年(1584)が最初だといわれます。この秀吉の朱印が押された越中攻めの陣立書は、その翌年に発給されたもので、秀吉の天下統一の足跡をたどる上で貴重な史料です。当館では初公開となります。

かい たい しん しょ
「解体新書」

II期

序図1冊・本文4巻 5巻5冊
 安永3年(1774)刊
 杉田玄白他訳 中川淳庵校 小田野直武画
 板元 江戸・須原屋市兵衛
 児玉幸多史料



(25.8×18.5cm)



(兜鉢高20cm 胴高47cm)

うすむらさき いと おどし に まい どう ぐ そく
「薄紫系威二枚胴具足」

江戸時代
 牧家史料

II期

具足とは、当世具足の省略した呼び名で室町時代後期から安土桃山時代に生じた鎧の形式の名称です。「当世」とは「現代」を、「具足」は「全て備わったもの」を意味します。当時(戦国時代)の人々は、伝統的な鎧に比べて「完璧な新しい鎧」ということで「当世具足」と呼びました。集団戦や鉄砲戦といった当時の戦法に適した鎧で、機能性・生産性を重視し、板札や蝶番を用いるなどの工夫が凝らされています。

薄紫系威二枚胴具足は戦国武将堀尾家、のち徳川譜代の大名石川家に仕え、家老職となった牧家に伝来したものです。兜の鉢は鉄黒漆塗の頭形鉢で、鉄板札七段下りの鞆をつけ、薄紫系や萌黄系で威しています。前立は銅鍍金の日輪。胴は左脇に蝶番をいれた二枚胴で、鉄碁石頭切付を草包み黒漆塗として薄紫系で素懸に威しています。頬当、三枚筒籠手、七本篠脛当が付属しています。

(学芸員 長佐古美奈子)



具足には漆工、金工、染織などあらゆる工芸の技法が使われています。兜の鞆が薄紫、萌黄、赤と変化しているところが、よく見ると美しいです。

西洋医学の扉を開いた書物。教科書などで誰もが一度は見たことがある、あの有名な解体新書。ほんものです！現在普通に使っている“盲腸”・“神経”・“筋肉”などの言葉は、この時の新造語であることを御存じですか？また、小田野直武による人体解剖模写図の精密さにご注目ください。



若狭国小浜藩医杉田玄白らによって、安永3年(1774)に刊行された、日本初の西洋解剖学書の本格的な翻訳書。原典は、ドイツの医師クルムスの著書 *Anatomische Tabellen* をオランダ語に翻訳した *Ontleedkundige Tafelen* 一通称「ターヘル・アナトミア」(1734刊)です。

『解体新書』翻訳の発端となったのは、明和8年(1771)3月4日に杉田玄白・前野良沢らが、江戸小塚原刑場(現東京荒川区)で行われた腑分け(解剖)を見学し、持参した「ターヘル・アナトミア」の図の正確さに衝撃を受け、翻訳を決意したことにはじまります。早くもその翌日から、前野良沢・杉田玄白が中心となって、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周らが翻訳にとりかかり、改稿11回を経る大変な努力の末、3年半におよぶ歳月をかけて完成させました。精密な挿図を描いたのは、秋田蘭画を代表する画家である秋田藩士小田野直武です。本書の翻訳・刊行は、医学史上画期的な出来事として高く評価され、またそれ以降の蘭学の飛躍的な発展のもととなった記念碑的な意義を持っています。

(学芸員 丸山美季)

くじょうけくるま ずからぐるま
「九条家車図(唐車部分)」(一巻)

I期

江戸時代
 西園寺家史料



(35.2×898.2cm)



最高級の牛車である「唐車」は、今では絵画のなかだけの存在になっていますが、66年前までは実物を見ることができました。右下の1枚の小さな絵葉書は、その事実を証明する貴重な逸品なのです。

牛車とは、天皇を除く皇族や貴族が、日常あるいは儀式の際に乗った車で、牛にひかせていました。平安時代から鎌倉時代にかけて多く利用され、『源氏物語』をはじめとする平安文学、あるいは『平治物語絵巻』や『春日権現験記絵』などの絵巻物にも、重要なアイテムとしてたびたび登場します。当館には、『西園寺家車図』と『九条家車図』という、当時使われていた牛車を描いた絵図の写しが各3点あります。

牛車には、それを利用する人の身分に応じていくつかの種類がありました。例えば、今回展示している『九条家車図』に見える「唐車」は、車体が牛車の中では最大で、格も最も高いものです。唐破風の屋根には檜檣が聳かれ、装飾も美しく、利用するのは上皇や皇后、摂政・関白といった身分の高い人々でした。

現在、葵祭や神社の祭礼などで牛車の実物を見ることはできますが、残念ながら唐車は残っていません。ですが、戦前までは、江戸時代末期の安政2年(1855)関白鷹司政通が孝明天皇の新内裏への遷幸に供奉した際に乗用した唐車が、東京皇室博物館(現・東京国立博物館)に陳列されていたのです。昭和20年(1945)に戦災で失われてしまいましたが、その様子は当時の絵葉書からしのぶことができます。

当館には、このほかにも中国で漢代に作られた陶製の牛車型明器(副葬品)や、昭和9年(1934)ベルギー特派大使のタイス氏との宮中午餐会のおりに配られた牛車型ボンボニエールがあります。

遠く中国漢代の牛車型明器、平安時代の牛車を描いた絵図、江戸時代に関白が利用した牛車の絵葉書、そして昭和時代の牛車型ボンボニエールと、場所や時代を超えて存在し引き継がれてきた牛車に、しばし思いを馳せてみられてはいかがでしょうか。

(客員研究員 徳仁親王・木村真美子)



鳳箒及唐車写真絵葉書 明治時代 (9.1×14.4cm)

大正9年(1920)山階宮芳麿王が臣籍降下した際に、大正天皇から下賜された文台と硯箱のセット。金銀の蒔絵で豪華に飾られています。

このように文台と硯箱を同じ文様で飾るようになったのはいつごろか、確かなところはわかりません。ただ、梅唐草蒔絵文台硯箱(重要文化財 広島・厳島神社)など室町後期の作例もいくつか伝わっているところから、そのころには、すでに文台と硯箱が揃いで使われるようになっていたと考えられます。

よく知られているように、室町時代は、連歌が大流行した時期でもあり、数多くの文房具が造り出されました。そのような流れのなかから、一具をなす文台硯箱という新しい形が生まれ、それが明治、大正のころまで連綿として受け継がれていくのです。

さて、この作品のもう一つの特徴は、精緻をきわめた蒔絵の技巧です。

ここでは、文様の部分を盛り上げて画面に立体感をもたらす高蒔絵という技法が主に用いられています。ほかにも平蒔絵、研出蒔絵、切金などの技法が駆使され

ていて、まさに蒔絵技術の展覧会といった趣をみせています。

ところで、この一具のうち文台の天板裏には「戸嶋光孚謹製」という金蒔銘が書き込まれており、これが大正から昭和初期にかけて、京都の漆芸界で著名な存在であった戸嶋光孚(弥一郎、光阿弥とも)によって制作されたものであることがわかります。

皇室や大名家などに納める作品には、作者銘を入れるのを遠慮するのがふつうです。しかしながら、ここには小さいけれどはっきりと銘が書き込まれています。明治以降、政府は万国博覧会への出品や帝室技芸員制度の新設などを通じて、わが国の伝統工芸がいに優れているかを世界にアピールしようとしてきました。そのような政府の姿勢は、おそらく作家意識の高揚にもつながっていったでしょう。菊の御紋が入った文台硯箱に刻まれた作者銘は、そのような時代的背景を物語るものと考えられるのです。

(客員研究員 小松大秀)

まつ かえで まき え ぶん だい すずり ばこ
「松楓蒔絵文台硯箱」(一具)

I・II期

としまこうふ
 戸嶋光孚制作
 大正9年(1920)
 山階家資料



(62.6×36.6×13.5cm)



微細な金粉を密に蒔き詰め、研ぎ出すことによって、まるで金の板を貼ったかのような外観をみせています。古くからおこなわれた沃懸地という手法に、金粉の精製技術、蒔絵技術の進歩が加わって、この豪華な装飾が実現しました。



(25.8×23.7×5.1cm)



左隻 (106.0×281.0cm)

「洛中洛外図小屏風」(六曲一双)

江戸時代前期
史料館・学芸員資格取得事務室資料

I 期

洛中洛外図は、安土桃山から江戸時代にかけて都を治める覇者たちの権威の象徴としてしばしば製作されました。織田信長が自ら統治する京の町を狩野永徳に描かせ、上杉家に贈ったという史実は有名です。一方、京の名所における庶民の遊興風景に主眼がおかれた洛中洛外図も描かれました。『京童』や『京雀』など、江戸時代前期に京都の名所案内本が数多く刊行されたのとほぼ軌を一にして富裕な庶民層の需要に応えた洛中洛外図が製作されます。

本図は、後者の一例であると考えられます。右隻は、三十三間堂からはじまり、方広寺大仏殿、清水寺と続き、画面下方には四条河原の芝居小屋、左端には祇園社が大きく描かれています。左隻に目を移すと、二重の回廊に囲まれた北野天満宮の社殿が堂々と描かれます。さらに北野社頭で野外飲食を楽しむ人や、参道にある「影向松」付近で踊りを楽しむ人々が描きこまれ、北野社が左隻全体の主題であることがわかります。城や御所などは描かれず、庶民にとってなじみ深い名所と、そこで催される歌舞伎、見世物小屋、湯立神楽、遊行風景などが詳しく描写されています。こうした主題選択や小屏風といった形態から、本図が庶民の需要にこたえた製作であることが推察されます。

時代が降るにつれて洛中洛外図の中から、特定の景観や場面のみが独立し、「北野社頭図」「四条河原図」「阿国歌舞伎図」などの新たな主題が生まれました。本図は、洛中洛外図のスタイルを残しつつ、いくつかの名所をクローズアップした過渡期の作例といえるでしょう。

(助教 鎌田純子)



寺社の前で手を合わせてお参りする人の姿がしばしば描かれているので、ぜひ探してみてください。庶民が京都見物や屋外遊びを楽しむ様子が見どころです。



この掛軸、形態にも注目してみてください。実際にご覧ただくと、一般的な掛軸より少し大きく感じませんか？ もともとは違う形で作られたものなのです。この大きさからも、実は洛中洛外図屏風の図の一枚(一扇)だったものを掛軸の形に仕立て直した、珍しい形態のものであることがわかります。



右隻 (106.0×281.0cm)

「洛中洛外図掛軸」(一幅)

江戸時代前期
学芸員資格取得事務室資料

I 期

本図に描かれているのは、内裏とその東側を中心とした、いまも有名な京都の名所ばかりです。

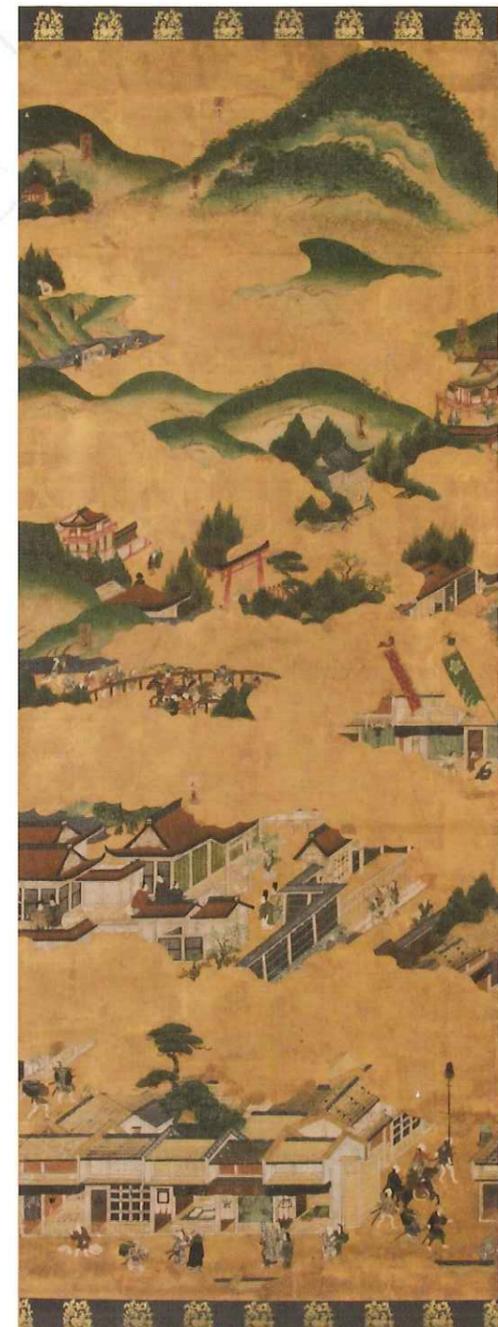
図の上部左側には、遠く鞍馬寺の本殿と多宝塔、その下には名産の火打石を藁かごに入れて川を渡して売る「畚おろし」の様子が描かれています。さらに下った画面中央付近の鳥居と社殿、そして駆け抜ける2匹の馬と歓声を上げる人々は、賀茂別雷神社(上賀茂神社)の競馬神事の盛り上がり伝えます。右手には、百萬遍(知恩寺)の本殿と、吉田神社の特徴的な八角形の社殿。都の中心である内裏と、商店が立ち並ぶ賑やかな町の様子は、手前側に大きく生き生きと描かれ、それぞれの場所に生きる人々の風俗がよく表わされています。

米国フリーア美術館所蔵の洛中洛外図屏風の六扇目とほぼ同図であることから、もとは六曲一双の屏風の右隻六扇目の図であり、洛中洛外図としては真野家本の流れをくむものと考えられるでしょう。

掛軸の形に仕立て直されたこの資料は、現在、学芸員資格取得のための授業や実習など、学生教育にも使われています。

(学芸員 吉廣さやか)

政治と貴族文化の中心である内裏には、衣冠を身に付けた人々が…。門の外から興味深そうに内裏を見ている人々の姿も見えます。



全景(本紙:146.0×56.1cm)

二世五姓田芳柳筆「春郊」(一面)

明治42年(1909)頃
史料館史料

I・II期

手入れの行き届いた芝に、遙か向こうまで木々が繁る、うらかな春の風景が描かれています。画面手前の、のびやかな枝に白い花をたくさん咲かせた木は、おそらく何かの果樹でしょう。遠景には、淡紅色に染まる、桜と思しき樹木も見られます。昼時でしょうか、木々は、おだやかな陽光を浴び、やわらかに影を落としています。洋紙に水彩の淡い色調がのり、春ののどかな情景がふさわしく表わされています。

水彩画は、もともと18世紀のイギリスで流行し、明治期に日本に伝えられ大正期にかけて流行します。わが国でも「水絵」という言葉が用いられたように、水彩画は伝統的な岩絵具を用いて紙に彩色する技法と近く、明治期の日本にさほどの抵抗感なく受け入れられたのでしょう。

本図を描いたのは、「GOSEDA」のサインから二世五姓田芳柳(1864~1943)であることが分かります。二世は、しばしば「G」にローマ数字の「II」を組み合わせた独自のサインを使用しました。師である一世五姓田芳柳は、歌川国芳に師事した画家です。また一世芳柳は早くから油彩画を手掛け、神童と言われた息子・義松を横浜で活躍していたイギリス人画家チャールズ・ワグマン(1832~91)に弟子入りさせます。さらに、当時最先端の西洋画教育機関であった工部美術学校に入学させました。義松はその後、長く欧米に滞在します。一方、弟子であり娘婿であった義雄(二世五姓田芳柳)に五姓田芳柳を襲名させ、家系と画系を継がせます。五姓田一門は、ワグマンや工部美術学校から習得した油彩画と水彩画の技法を用い、さらに西洋画らしい主題を描くようになりました。

ところで本作は裏に、「五姓田芳柳寄贈」と「明治42年5月」の文字が記されており、二世芳柳自らこの絵を学習院に寄贈したことが判明します。寄贈の理由はわかりませんが、その翌年、二世芳柳は「日英博覧会」のため渡英、出品作が受賞します。本図は、水彩画という画法に加えて、果樹を春の主題として選んだ点に、イギリスの薫りを感じさせます。ワグマンを介しての憧れの国を意識して絵筆を揮ったのかもしれない。そして、画面端にひっそりと見える鳥居らしきモチーフは、一体、何でしょうか。想像の域を超えませんが、五姓田一門が、明治天皇の肖像を始め、明治政府から記録画などの注文を次々に受け、画派として確たる地位についた史実を考えれば、皇室への敬仰の念をひそかに絵に加えたことも納得できるのではないのでしょうか。

(館長 高橋裕子)



(本紙:33.4×49.5cm)



水彩画独特の淡く繊細な色調が見どころです。一体何種類の緑色が使われているのでしょうか。果樹の白い花は、塗り残しで表わされています。

「ボンボニエール」

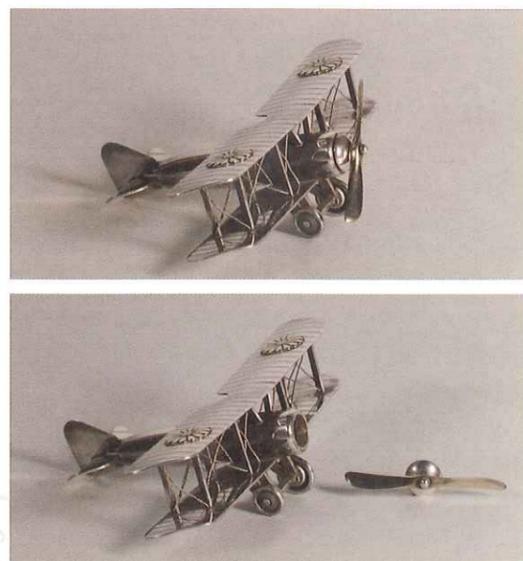
明治~昭和時代

高橋家史料・山階家資料・筑波家史料

I・II期



とにかくいろいろな意匠が凝らされているところが素晴らしい。この複葉機形ボンボニエールはプロペラが外れ、中に金平糖が入るようになってます。他のボンボニエールもどこが開くのか、想像してみてください。



複葉機形ボンボニエール(6.8×9.2×2.6cm)

「辻邦生・佐保子夫妻軽井沢山荘」(模型)

昭和51年(1976)4月築 いそぎあらた 磯崎新設計
縮尺:1/50模型 紙風景制作
辻邦生資料

I・II期



軽井沢山荘



軽井沢山荘1/50模型
(31.6×20.4×13.6cm)



軽井沢の不思議な家—

辻邦生のエッセイにも度々登場する軽井沢の山荘。傾斜地に沿うように建ち、2本の木が屋根を貫く様子からは、自然を敬愛する辻の思いが伝わってきます。この山荘で過ごす喜びを綴った彼の日記とともにご覧下さい。

辻邦生
昭和50年(1975)~昭和52年日記
(31.5×22.5cm)



辻邦生が「偏奇の巢(ヘンキーノス)」と名付けた軽井沢の山荘は、1976年(昭和51)磯崎新の設計により建てられました。辻が浅草の劇場でよく見かけた永井荷風の自邸 偏奇館から命名されたこの名前には、避暑地特有の喧騒と社交から逃れて、偏屈なまでに仕事や読書に没頭したいという彼の思いが込められています。山荘は傾斜地を利用して建てられ、内部はいくつかの層に分かれて、各部屋を小さな階段がむすぶ構造になっています。辻邦生・辻佐保子という二人の物書きが、同じ空間にしながら邪魔にならずに過ごせるようにと、磯崎は吹き抜けを挟む形で2階の左右両端にそれぞれの書斎を設け、椅子に座っている状態では互いに見えませんが、立ち上ると相手の姿が見える高さで仕切っています。

周囲の樹木をそのまま残しているため2本の木が山荘の屋根を貫いており、夫妻がどれだけ自然を愛したかが、写真からもよく伝わってきます。

辻邦生がこの山荘での生活を楽しむ様子を日記から抜粋してみましょう。

われらが「偏奇ノ巢」山荘の第一日である。静かな夜にシューベルト、メンデルスゾーン、デズモンドなどを聞いて、ぼんやりしている。考えるかぎり最も落ち着いた山荘ができた。Aが何度も手直しを言いつけ、その結果ようやくここまで辿りついた。(中略)霧が出て山の斜面の木立のあいだを流れてゆく。暖炉の前に坐っていると、こんな幸運にめぐりあえるなんて有難いことだと思う。

《四月三十日(金)軽井沢 より》

(学芸員 生田享子)

ボンボニエールとは、皇室・華族家などの慶事の際に配られる、主に銀製の小さな菓子入れです。華やかな意匠工芸が施され、家紋があしらわれることも多くあります。明治中頃から、皇室の大礼、成年式、成婚などの饗宴の引き出物として列席者に贈られるようになり、現在もその慣習は続いています。

ボンボニエールという名称は、フランス語の「ボンボン入れ bonbonnière」に由来するもので、明治大正期の史料中には「菓子器」「ボンボニー」「ボンボン」と記載されている例もあることから、いつからボンボニエールと呼称されるようになったかは定かではありません。広く一般に「ボンボニエール」名が普及するようになったのは、秩父宮勢津子妃著「銀のボンボニエール」(1991)が公刊されてからのようです。日本では中に金平糖が入られます。

ボンボニエールの本体素材は銀製のものが圧倒的に多いのですが、なかには七宝を併用したもの、木製塗装、陶器、竹製などのものもあります。昭和16年(1941)の三笠宮崇仁親王百合子妃の婚儀に際して、貞明皇后から贈られたボンボニエールは竹に塗りを施したもので、また、両殿下の成婚の饗宴引き出物はジェラルミン製でした。この時代には皇室であっても、銀を使用することが不可能だったからです。

様々な形、意匠のボンボニエールをじっくりとご鑑賞ください。

(学芸員 長佐古美奈子)

学習院大学史料館 開館35周年記念コレクション展

「^{これ}是！」 ※開館35周年にちなみ、選りすぐりの35点を陳列いたします



I期 平成23年10月1日(土)～10月31日(月)

II期 平成23年11月1日(火)～12月3日(土)

■主な出品資料

洛中洛外図小屏風(I)、洛中洛外図掛軸(I)、横山大観「霊峰不二」(II)、羽柴秀吉朱印状(II)、解体新書(II)、二世五姓田芳柳「春郊」(I・II)、九条家車図(I・II)、辻邦生・佐保子夫妻軽井沢山荘模型(I・II)、松楓蒔絵文台硯箱(I・II)、薄紫糸威二枚胴具足(II)、高松宮妃喜久子殿下所用ビーズドレス(I)、ボンボンニール(複葉機形、香合形他(I)、水上飛行機形、牛車形他(II))など全35点。

史料館講座のおしらせ

第65回史料館講座

10月15日(土) 14:00～15:30

講師:齋藤慎一氏(江戸東京博物館主任学芸員)

「徳川将軍家の婚礼調度—女乗物を中心に—」

第66回史料館講座

11月26日(土) 14:00～15:30

講師:彬子女王殿下(立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー)

「日本美術史のはじまり—ウィリアム・アンダーソンと大英博物館—」

* 学習院創立百周年記念会館 正堂

* 入場無料・事前申込不要

新刊ご案内『写真集 大正の記憶—学習院大学所蔵写真』

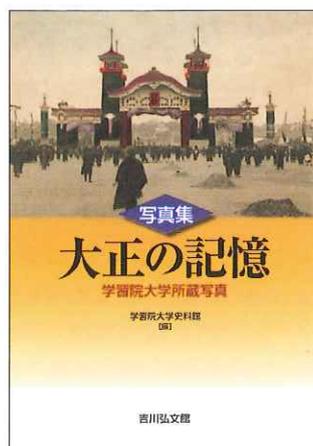
大正天皇の即位や裕仁親王(昭和天皇)の立太子、関東大震災…。 “大正時代”を写し撮った第一級資料。豊富な写真でいま甦る。

学習院大学史料館編

吉川弘文館発行

2011年9月刊行

定価12,000円+税



ミュージアム・レター第17号

2011年9月10日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(3986)0221

内線 6569

FAX 03(5992)9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>